あの人のマイベスト松山

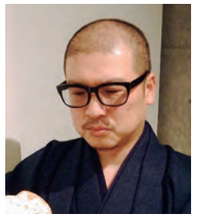
いい、加減。まつやま

松山をよく知る人、松山を愛する人。
そんな「あの人」がいちばん好きな松山を教えてくれました。
自然も人も歴史も〝いい、加減。〟です。

A manga artist, poet, writer, fashion model, and other prominent figures who know and love Matsuyama well will share their "favorite parts of Matsuyama" related to its nature, history, and culture.

天下の名湯を普段づかいできる贅沢「湯のまち」

私は漫画家ということもあり、たまに編集の方が他県から松山を訪れる。せっかくだからと軽く市内観光をするのだが、「道後温泉本館ってこんな街中にあるんですか！」とよく驚かれる。温泉といえば山間の静かな場所か郊外にあるイメージのようだ。そんな時「いいでしょ！」と何だか誇らしくなるのが不思議だ。さすが日本最古の温泉である。そんな私にも行きつけの温泉がある。車でちょっと走れば、どこかの温泉施設へ行けるのが松山の良い所だ。原稿が上がってから入る温泉は、また格別だ。



和田 ラヂヲさん

1964年、松山市生まれ。91年「イキナリどうだ」でデビュー。同年より「スカの群れ」の連載開始。最新刊は「猫も、オンダケ」（KADOKAWA）。ラジオ・テレビのレギュラー出演のほか、京都精華大学マンガ学部ギャグマンガコース非常勤講師としても活躍。

俳句のある松山はとてもラッキーなまち「俳都松山」

夏井 いつきさん

松山市在住。8年間の中学校国語教諭を経て、俳人へ転身。俳句集団「いつき組」組長として創作活動＆指導に加え、俳句の授業〈句会ライブ〉、「俳句甲子園」の創設にも携わるなど幅広く活動中。平成27年5月「俳都松山大使」に就任。TBS「プレバト!!」俳句コーナー他、出演番組多数。

正岡子規という偉大な俳人が生まれて150年、「俳人山脈」と呼ばれるほどのたくさんの俳人を輩出した松山市はとてもラッキーなまち。俳句という素晴らしい宝を、先人たちが与えてくれたのです。今改めてその価値を大切にしようとする機運が高まり、「俳都松山宣言」など俳句でこのまちを豊かにしようという動きが起こっています。だからもっともっと、俳句で遊んでいいと思うんです。いろんな人がいろんな角度から俳句を活用してもいい。何をやっても、俳句の価値は揺るぎません。そんなひ弱なものではないのですから。もっともっと俳句で遊び、「俳句なら松山」といわれるようにしていきたいですね。

いろんな良さがギュッと濃縮「自然と美味しい食」

ラブリさん

1989年、松山市生まれ。2010年にリポーターとしてデビューし、現在はファッションモデル、タレントとして幅広く活躍中。神社仏閣めぐりを趣味としており、10代で四国遍路を結願した経験をもつ。

東京に出て気づいたのは、田舎過ぎず、都会過ぎない、いろんな良さがギュッと濃縮された松山の魅力。海があって、山があって、温泉があって、繁華街もあって。なんでもちょうどいいバランスで揃っているんです。私は松山に帰ってきたら、まずミカンを食べて、温泉に入って、魚を食べて。野菜も、よそで食べるより美味しいんです。もちろん故郷だからっていうのもありますが、松山に帰ってきたら本当にリラックスできます。私を応援してくれているファンの方たちも、私が「松山はいいよ」って言うから、どんどん松山を好きになってくれています。ずっとこのままの松山であってほしいですね。

住民が支えてきた遍路みち「四国遍路とお接待文化」

先ごろ、ニューヨークタイムズ紙が、全世界で見ておくべき大事な場所を数十カ所挙げている。その中に日本では唯一、四国遍路があった。戦争、テロ、難民がうずまく世界で、日本の四国という島が、ため息が出るような聖地とされたのだ。まこと四国は不思議な島である。四千キロの遍路みちが細々とくねくねと作られ、年間数十万人の〝お遍路さん〟が白衣を着て、黙々と歩いているのだ。口に低く唱えるのは〝南無大師遍照金剛〟のお題目。笠に〝同行二人〟とあるのは四国八十八ヶ寺を開いた空海上人と歩いているのだというシルシ。

二十一世紀に入ってから、四国遍路を世界文化遺産に登録しようという動きがあったが、立ちやみになった。寺々に恐るべき秘仏があるのでもなく、世界に誇る文化財があるわけでもない。むしろ何にもないのだ。

お遍路さんに、何で歩いているのかを聞いてはいけないとされている。人に言えない罪業や煩悩を抱いて歩いているからだ。人を殺した人もいる。亡くした我が子の幻影を求めてさまよう人もいる。つまり懺悔と再生を求めて歩くのだ。松山の人、松山を訪れた人には五十一番札所の石手寺を訪ねて欲しい。そこにはお遍路さん発祥の衛門三郎の像があり、お大師さんに出会って左手に石を握らせてもらい、伊予の領主・河野家の赤児に再生することが示されているからだ。

遍路道の商家に生まれた私は、家の前に佇むお遍路さんのおぞましい病躯の姿にふるえながら、両手にすくったお米を〝おせったい〟として差し出した。四国八十八ヶ寺に素晴らしい宝ものがあるのではない。寺と寺の間に生活するささやかな農民や住民たちこそ、遍路みちの支え手なのだ。彼ら彼女らは千年の前から〝おせったい〟が何たるかを教え込まれている。一口に云えば〝無財の七施〟である。財産はなくとも、七つの施しはできるというお釈迦様の教えだ。荷物を持ってあげること、席を譲ってあげることから始まって、宿を恵むことまである。四国の島の人たちは千年、この教えを守ってきたのだ。その中に、お金を渡してはいけないという深い智慧も眠っている。私は例えばお遍路大学を立ち上げて、この千年の伝統を伝承する手助けをしたいと、今、強く願っている。

早坂 暁さん

愛媛県温泉郡北条町（現松山市）出身。新聞社編集長を経て作家に転身。1,000本以上の映画・ドラマの脚本、小説を執筆し、ドキュメンタリーや舞台脚本、演出なども手掛ける。代表作は『天下御免』『夢千代日記』『花へんろ』『ダウンタウン・ヒーローズ』『華日記』『戦艦大和日記』など。2018年に市栄誉賞受賞。